

大学図書館変革期の20年

岩 猿 敏 生

私の京大図書館在職は1956年から76年までの20年間である。前半の10年間は、戦後の貧しさから高度経済成長への助走期であり、1956年の経済白書は“もはや戦後ではない”と宣言した。しかし、当時言われた神武景気も国民生活のすべての分野にまで及んだのではない。私の就任時の図書館は、予算面でも施設面でも、戦後の貧しさをそのまま引きずっていた。

ただ幸いであったのは、図書館活動に熱意を持つ若い職員と、経験豊かなベテラン職員を擁していたことである。このような人材を持っていたことが、1961年に附属図書館創立60周年を記念して、わが国最初の単館の大学図書館史の刊行を可能にした。それは、図書館60年の歴史を顧みることによって、新しい時代の大学図書館の出発点を確認しようとする試みであった。

戦後の教育改革全般がアメリカをモデルにしたように、大学図書館の改革もアメリカにモデルを求めた。私は幸いにも、飛躍的な発展をとげつつあったアメリカ各地の代表的な大学図書館を、1959年秋という比較的早い時期に、2ヶ月間にわたって訪ねることができた。しかし、旅行中私は彼我の落差の余りの大きさに、日本の大学図書館の将来について絶望感さえ抱いたが、大学図書館の向かうべき新しい方向だけは、はっきりとつかみとることができた。それは、なによりもまず学部学生への図書館サービスの充実であった。

私がアメリカを訪れた年、ミシガン大学の学部学生用図書館が、ハーバード大学のラモント図書館に続いて完成したばかりであった。「書物のための殿堂」としての図書館から、「利用者のための殿堂」へと、大学図書館のあり方の大きな転換を明確に示すものであった。

新制大学発足後も、わが国の大学は教育不在を批判されていた。高等教育への進学率が15%をこえる時、大学は少数のエリート学生だけが学ぶエリート型から、多様な学生が大量に進学

するマス型大型へと、その性格が大きく変わっていくと言われるが、わが国で高等教育への進学率が15%をこえたのは1963年であった。大学紛争の激化した1970年の進学率は24%であった。教育不在と言われた上に、マス型化という大学じたいの変化に、大学がうまく対応できなかったことが、当時の大学紛争の原因にあったと思う。

私の在職した後半の10年間は、1968年に始まる全国的な激しい大学紛争に揺れ動いた時代であった。他大学では図書館も紛争の渦中に巻きこまれ、学生によって封鎖されることもあったが、本館の場合、周辺の学部の建物がすべて封鎖されていたにもかかわらず、平常通り開館することができ、いつも学生たちで満席であった。

60年代後半から70年代にかけて、図書館業務にコンピュータの導入が試み始められる。それは、紙メディア中心から電子メディア中心への図書館の大きな変革期の始まりであった。私の在職した20年間は、日本の大学がエリート型からマス型へ、さらに情報媒体が紙メディアから電子メディアへと、大学図書館にとっては二重の大きな変革の過程の歳月であった。

本館の創設された翌年（1900年）の本学の蔵書数は7万6千冊余。同年東大は26万冊をこえていた。こうした数字は、当時のアメリカの大学図書館のうちハーバード大学には遠く及ばないが、その他の大学とは比肩しうる。開館時間数においては、本館も東大も朝7時から夜9時まで1日14時間である。当時アメリカの大学図書館でも、まだ日中だけ週に10数時間程度しか開館しない図書館がかなりあった。今世紀初頭では、いくつかの数字の上でみると、彼我の間に大きな落差はなかった。しかし、その後落差が大きくなっていくのは、大学の教育・研究の上で、図書館にどれ程の重要性が与えられるかによるのではないかと、本館の歴史を顧みて思わざるをえない。

（いわさる としお：元附属図書館事務部長 元関西大学教授）